

聖書：ルカ 22：39～46

説教題：みこころのとおりに

日時：2013年1月13日

イエス様は最後の晩餐の会場を後にして、祈るためにオリーブ山へと出て行きます。これまで最後の晩餐において、イエス様と弟子たちのギャップが浮き彫りにされました。イエス様は特別な思いで聖餐式を制定してくださったのに、弟子たちは誰が一番偉いかと議論しました。イエス様はサタンがあなたがたをふるいにかけていると警告したのに、弟子たちは耳を貸さず、自分たちは大丈夫と豪語しました。イエス様はこれからの試練に対して霊的な備えをするようにと言われたのに、彼らは文字通りの剣を指して、ここに二本ありますなどと答えました。イエス様は「もう十分」と打ち切って、祈りの場へと出て、弟子たちに「誘惑に陥らないように祈っていなさい」と言われます。しかし 45 節で彼らはイエス様のそばで眠り込んでいました。こうした状況の中で、イエス様はついに裏切り者の手に渡されます。こうした経過の中で、イエス様は人間の力や支えによらず、ただご自身お一人によって救いを勝ち取ってくださったことが示されるのです。

さて、弟子たちに「祈っていなさい」と言われたイエス様は、ご自身が祈りに専心されます。そのイエス様の口から出てきた第一声は、実に驚くべきものでした。42 節：「父よ。みこころならば、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願いではなく、みこころのとおりにしてください。」 何とイエス様はここで「杯」すなわち十字架の死を、わたしから過ぎ去らせて下さいと嘆願しています。これはどういうことでしょうか。イエス様はこの目的のためにこそ、人として地上に来られたのではなかったのでしょうか。イエス様はこれまで繰り返して、ご自身は必ず多くの苦しみを受け、人々から捨てられ、殺されることを予告してきました。数時間前にも聖餐式を制定して、ご自分こそ、旧約の過越が指し示してきた神の小羊であることを示されました。なのにこの土壇場に来て、なぜ今さらのようにこんな言葉を口にされたのでしょうか。

私も以前はそのような疑問を覚えたことがありました。しかしそれはイエス様の身代わりの死を、簡単なことのように考えてしまっているからでしょう。イエス様は私たちと同じ人間性を取られたお方です。迫り来る死を前にして、どうして恐怖を覚えずにいられるでしょう。しかもイエス様は当時の極刑である十字架刑によって殺されようとしています。体が裂かれ、呪われた者として木に吊るされるのです。イエス様であろうと、やはりが「死」は嫌なこと、できれば避けたいことだったのです。特に罪とは何の関わりもないお方にとって、その罰としての死を経験しなければならないことは、私たちの想像以上に恐るべき出来事だったのではないかと考えてみなければならないでしょう。

しかし私たちはここで単なる肉体的な死だけを考えていてはなりません。イエス様がここで

死を恐れたのは、その死は肉体的な死というレベル以上のものであったからです。もし肉体的な死だけを考えるなら、歴史の中には死を恐れずに殉教の道を選んだ人たちもたくさんいます。それだけを見れば、彼らの方がイエス様よりも勇敢だったということになります。イエス様はここで「杯を取りのけてください」と言っています。この「杯」という言葉は旧約聖書にたくさんその用例があります。イザヤ書 51 章 17 節：「さめよ。さめよ。立ち上がれ。エルサレム。あなたは、主の手から、憤りの杯を飲み、よろめかす大杯を飲み干した。」 エレミヤ書 25 章 15 節：「この憤りのぶどう酒の杯を、云々」つまりこの杯とは、神の怒りの杯です。積もりに積もった人間の罪に対する神のさばきの杯です。イエス様はその杯を一人で飲み干そうとしている。正義が満足されて、聖なる神の怒りが静められるために、神の徹底的な罪に対する嫌悪の下に自らの存在を置き、身代わりとしてのさばきを受けようとしている。一体誰がこれを思って恐怖に震えずにいられるのでしょうか。そしてこれは父なる神との断絶を意味します。永遠の昔から父なる御父と一つの関係に生きて来られた御子が、御父から御顔をそむけられ、何の光もない暗黒の中に捨てられるのです。私たちにはその死の恐ろしさが見えず、想像することすらできないので、なぜイエス様は恐れているのか、などと愚かな問いを発してしまうのですが、イエス様はご自分が引き受けようとしている死はどんなに恐ろしい死なのか、誰よりも良く分かっておられる。それゆえに、できることならこの杯をわたしから取りのけて下さい！と祈り叫ばずにはいられなかったのです。

しかし、このイエス様の恐怖心を思い巡らしてみればみるほど、さらなる驚きとなって迫ってくるのは、イエス様が続けて「しかし、わたしの願いではなく、みこころのとおりにしてください」と祈られたことです！私たちは自分の心にある率直な思いをそのまま祈って良いのです。しかし改めてここに教えられている原則は、それは神の御心がなされることを優先して求める中で祈られる必要があるということです。イエス様は祈り始める最初の時点でも、このことを祈っていました。「父よ。みこころならば・・・」と。ですからイエス様の祈りは終始一貫、父の御心こそがなるようにという祈りだったのです。その祈りに前後をしっかり支えられている中で、ご自分の気持ちを正直に告げる祈りがなされていたのです。

これは私たちすべてにとっての模範です。しかしこう祈った瞬間にすべてが解決し、心に平安がやって来たわけではありません。なおそこにはどんなに厳しい戦いが続いたかが、続く 2 つの節に記されています。まず 43 節：「すると、御使いが天からイエスに現われて、イエスを力づけた」 実にイエス様でも、このような助けがなければ、乗り越えられない状況の中にこの時あられたということです。これは反対から見ると、神は御心にかなう祈りをする者には、このように上から助けてくださるということでもあります。一つ思い起こしたいのは、この福音書の 4 章で見た荒野の誘惑の記事です。あの時サタンはイエス様に「あなたが神の子なら、ここから飛び降りなさい。『神は、御使いたちに命じてあなたを守らせる。』と書いてあるから。」とけしかけました。しかしイエス様は、御言葉の約束は信じるべきものであって、前もって試すべきものではないとされました。そして確かに神はここで、天使を遣わして守り支え

てくださいました。神の御心にかなう祈り・格闘・決断をする者には、神がこのように上から助けてくださるのです。私たちはそのことを信じて祈って良いのですし、ただだからこそ祈るべきなのです。

もう一つのイエス様の姿は44節です。「イエスは、苦しみもだえて、いよいよ切に祈られた。汗が血のしずくのように血に落ちた。」 「苦しみもだえて」とありますが、これはこの運命から逃れられずに、悲鳴を上げる弱い人の姿でしょうか。むしろ私たちは反対に、この上なく強い人の姿として、これを見る必要があると思います。マラソン選手も長距離を走って、体力も限界に近づいてきたら、苦しい顔をします。トップを走っているけれども、テレビに映し出される姿は、肩で息をし、顔を歪めているという場合があります。それは弱い人の姿でしょうか。もし弱いなら、そこでやめてしまえば良いのです。苦しい状態から解放されます。しかし強い人はそこでやめません。その人は勝つために、なお悶え苦しむ戦いを続ける。まさにこのイエス様も同じでしょう。イエス様はここでただ受動的に苦しんでいるのではなく、積極的な意味で戦っておられるのです。父の御心に従うために、いよいよ切に祈りながら、ご自身の持つすべてのエネルギーを注ぎ出して戦っておられる真に力強い方の姿を私たちは見るのです。

そのイエス様からは、汗が血のしずくのように地に落ちました。血のしずくの「ように」と書いてあるのであって、実際の血が落ちたわけではありません。出血した時は、血がポタポタと体を伝わって流れ落ちます。その光景を私たちはある程度リアルに想像できるでしょう。まるでその状態にある人のように、イエス様からにじみ出てきた汗は全身を流れて、ポタポタと流れ落ちた。これはまさに人間の極限を超えた戦いです。私たちの中で、祈ってこのような汗を垂らした人がいるでしょうか。十字架への道を選び取ることは、イエス様にとって、このような異常な生理現象に現れずにはいなかったほどの大きな犠牲であったということです。

私たちは今日の箇所に見るべきでしょうか。その一番のメッセージは、イエス様の私たちに對するとてつもなく大きな愛でしょう。なぜイエス様はこのような苦しみを耐え忍ばれたのか。それは私たち一人一人のためです。イエス様は私たちが罪の滅びから救うために、ご自身の願いに逆らって、私たちの身代わりの死を遂げる道をここで最終的に選択して下さったのです。イエス様としては死にたくなかった。これは意気地がないということではなく、当然のことです。誰が神の怒りとさばきの死を身に受けたいでしょうか。イエス様は前に進むなら引き受けなければならないその十字架の杯を思って、この時点でほとんど死にそうな状態にまでなったのです。にもかかわらず、私たちの救いのために、この恐怖と戦い、苦しみをご自身の上に担うことへと進んで下さった。私たちがもう一度心に留めたいことは、イエス様は私たちの救いのために、恐れることなく死に向かって行ったのではないということです。むしろイエス様は恐れながら死に向かって下さった。私たちのために叫びながら、涙を流しながら、汗を血のしずくのように滴りおとしながら、前に進んで下さったのです！私たちは何とイエ

ス様に深く愛されている者たちでしょうか。私たちはこのようにして前に進んでくださったイエス様をしっかりと見つめて、ひざまずいて礼拝をささげたいのです。そして私たちのためにご自身のすべてをささげてくださったイエス様に心から感謝して、自分のすべてをささげてイエス様に応答する歩みに進みたいのです。

また私たちはここに祈りの模範を見させられます。祈りとは自分の願いを神に押し付け、神に聞いてもらうことではありません。私たちは自分の率直な願いを神に祈って良いのですが、心すべきは「私の願いではなく、御心の通りになしてください」という祈りを絶えず上に持って来ることです。私たちは自分の頭で考えた良いこと神に導いてもらいたいと思いますが、神の知恵こそ、私の小さな頭にはるかに勝る優れた知恵です。また神の善こそ、私たちが考える善にはるかに勝る最善です。私たちは苦しい状況で祈りをやめてしまうのではなく、イエス様が「いよいよ切に祈られた」ように、御心なることを求めて益々祈るべきです。そのようなイエス様に対して、神は天使を遣わし、御心の道へと奮い立たせ、十字架のみわざを全うさせ、復活の栄光へと導かれました。私たちに対しても同じです。御子にあつて救われ、神の子どもとされた者たちとして、父なる神は私たちに良い御心だけを持っています。この神が、私たちを助け、支えてくださることを仰いで、私たちも祈りたいと思います。自らの願いを述べつつ、「しかし、わたしの願いではなく、みこころの通りになしてください。」と。その祈りを通して、神は私たちを最善へと導き、神の栄光を現わす道具として用いてくださり、またそこに伴う最大の喜び・幸せに生かしてくださるのです。